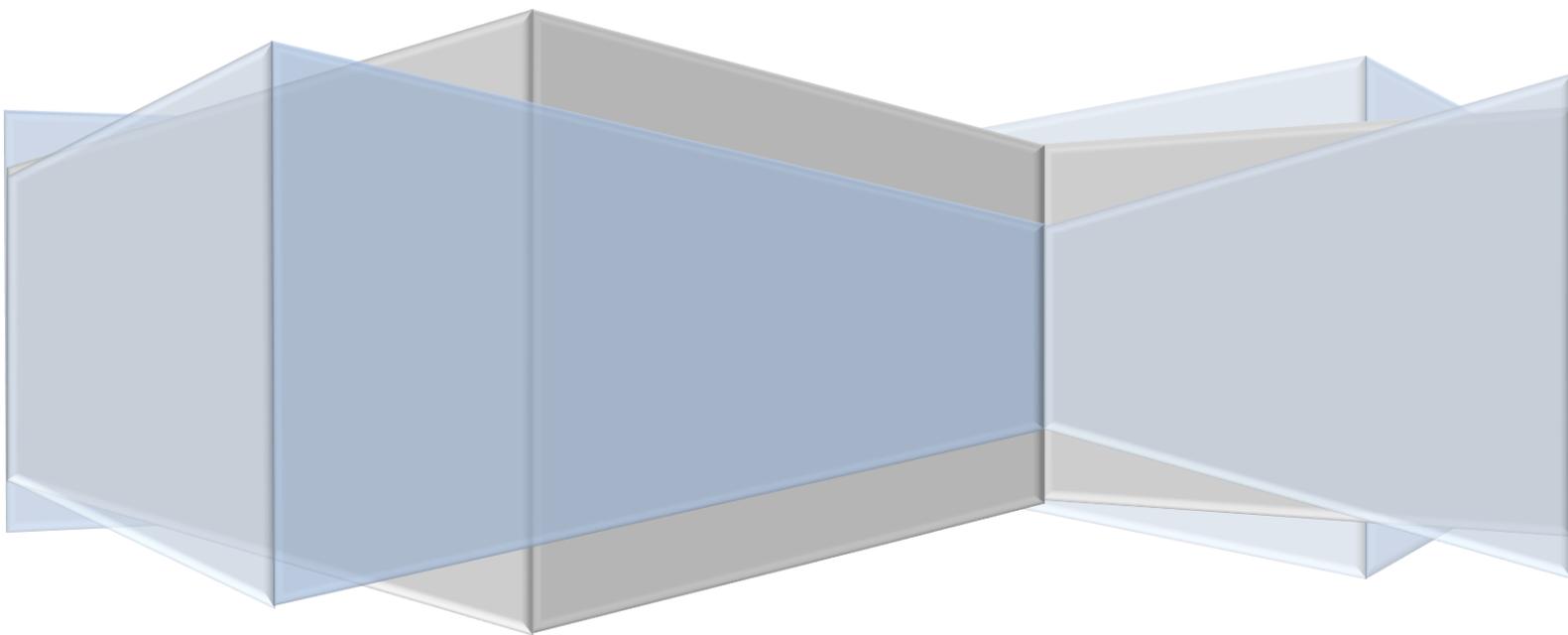


閉会セッション



閉会セッション

チェア :

トーマス・コーベリエル (自然エネルギー財団 理事長)
末吉 竹二郎 (自然エネルギー財団代表理事 副理事長)

講演者 :

飯田 哲也 (自然エネルギー財団 政策イノベーション事業部ディレクター)
大林 ミカ (自然エネルギー財団 アドボカシー・助成事業部ディレクター)
村沢 義久 (自然エネルギー財団 テクノロジー・ビジネス事業部ディレクター)
孫 正義 (自然エネルギー財団 会長・設立者)

議論概要 :

○ トーマス・コーベリエル

今回シンポジウムが成功に終わり、日本における再生可能エネルギーの今後に向けた話ができただ。今回学ばれた中で、特に有意義だったポイントを話していただきたい。

○ 村沢 義久

2日間のセッションで多くのことを学んだ。重要なこと1つを挙げる。

最後のセッションで寺島実郎さんが、補助金とFITに頼っている間は、再生可能エネルギーは1人前ではないと言われた。自然エネルギー財団のトーマス理事長も同じことをよく言う。私は太陽光発電に注力し、とにかくコストを下げる努力をしている。神奈川では1kWあたり、太陽光の住宅用の設置コストを現在60万円から37万円まで下げている。グリッドパリティは家庭用は24~25円で、現在27円まで下げている。日本でもグリッドパリティが太陽光については常識的であるというところに向けて、今後も努力していきたい。

○ 大林 ミカ

国内外から多くの人にご参加いただき、主催者側として感謝する。Ustream視聴者も7~8万人いる。

一番印象に残ったのは、電力市場改革の議論だ。昨年9月の未来館でのシンポジウムで、「事故からもう半年たった」という話をした。今回は1年もたったが、日本の状況はほぼ何も変わっていない。FIT導入も、震災以前から閣議決定していたことだ。私たちは全速力でいろいろな物事を進めなくてはならないのに、まだ何も変わっていない。

電力市場改革の問題において、長期、中期、短期的な課題をどう解決していくのか。セッションで強調されたのは、強い政治的な意思が必要だという話だった。多くの強いステークホルダーをどう納得させて、透明で強靱な新しい市場に導いていくかが大事だと考えている。

○ 飯田 哲也

この「Revision2012」のタイトルに込めた意味合いは、リニューアブル・エナジーの新しいビジョン、リニューアブル・エナジーが新しいビジョンを開く、これまでの古い考え方をリバイス(リビジョンする)する、という3つの意味合いがあ

る。参加者の頭の中ではビジョンができたのではないかと思う。

山の手線内側をパネルでうめても原発 1 基分で非現実的だ、などといった議論が未だにされているが、再生可能エネルギーは、世界でははっきりとメインストリームになっている。電力市場の中で、再生可能エネルギーが非常に上手に統合されていること、統合ができること、統合していくためにも電力市場の改革が必要だといったカッティングエッジ（先進的な）の状況がある。日本はこれまで、引きこもりのように国際的なアリーナからステップアウトしていたが、3・11 を機に政策議論のアリーナに戻ってきた。最後のセッションの孫さんのように突出したビジョンを生みだし得ることも、今回の議論でわかった。

FIT は補助金ではなく市場を再設計するためのルールである、電力市場はフリーマーケットではなく規制の再設計が必要だ、との考えを共通認識として確認し、古い議論を打ち破ることができたと思う。

○ 末吉 竹二郎

2 日間の素晴らしい会議を通じて、自然エネルギーはもはや夢ではなく、現実のエネルギー・ソースだということを改めて感じた。しかも世界中で日々進化し、新しい問題解決が図られていると同時に、将来に対する大きな夢も描かれている。

日本は環境対応世界 1 位と自負している間に、どうやら世界から大きく取り残されてしまったようだ。我々は、自然エネルギーの本当の力、将来へのポテンシャルをみくびっていたのではないか。

今回、多くの海外のゲストから、日本はポテンシャルが高いので世界のリーダーシップは取り戻せると言われた。ありがたいコメントだが、それ

は慰めかもしれない。そのポテンシャルを生かすために、早く動き、キャッチアップしようではないか。

自然エネルギーを考えることは、日本のあり方全体を考えること。日本という社会を、これから 21 世紀にどうするのか、経済・産業をどうするのか、日本の個別企業がどう勝ち残っていくのかを考える話であったと思う。21 世紀という新しい社会を日本人が 1 人 1 人、どういう価値観を持ち、どう生きていくのかを、ベースから考える話であったと思う。

3・11 からの復興の先に、新しい日本をつくるという大きな目標があるはず。自然エネルギーをどうしていくのか、それを一つのキーワードにしながら、日本が 21 世紀の世界の中で、新しい国家モデルになるように国全体の努力をしていくことが非常に重要になってきたと痛感した。

おかげさまで財団は公益財団法人となり、新たな使命と責任が加わった。世界にキャッチアップし、より良い世界を作っていくための一つの役割を果たしていきたい。

○ コーベリエル

今回非常に明確になったのは、自然エネルギーが、我々の需要以上のエネルギー量を提供できることだ。晴れの日が多くない英国でもソーラーで多くのエネルギーを得ている。モンゴルでも、アジアに対して 2.6GW の電力供給の可能性があると聞いた。デザーテック社からは、世界の砂漠のほんの一部だけで、世界中のエネルギー需要量を太陽光で供給できると聞いた。

さらに、新しい技術が急激に発展してきたことも学んだ。太陽光パネルの価格がたった 2 年間で 50~75% も安くなっているように、太陽光発電は

経済性のある技術なのだ。パネルだけではなく、システム全体でも日本でもコストを下げている。

風力、バイオエネルギーも低コストで利用できることがわかってきた。従来型のエネルギーに投資してきた人、化石燃料などを推進してきた人も、1年前と今ではまったく違う考え方を持っているだろう。自然エネルギーの推進者は、あきらめず従来型エネルギー推進者に対して説得を続けてほしい。

孫さんが説明されたように、原子力は安定・安全・安価なエネルギーだと信じていたが、昨年それが真実でないことがわかった。再生可能・持続可能で、安全なシステムに移行することは、一人ではもちろん、一つの社会的アクターだけではできない。多くの団体組織の貢献が求められている。我々は皆、何らかの役割を果たすべきなのだろう。

モンゴルの自然エネルギーやアジアスーパーグリッドは、日本のエネルギー供給に重要な貢献をするかもしれないが、すべての問題が解決されるわけではない。同時に、日本の再生可能エネルギーにも大きな投資が必要だろう。アジアスーパーグリッドの実現のためにはまず、効率的で正しく機能する日本国内のグリッドが不可欠である。

飯田さんが常に指摘しているように、再生可能エネルギーにとって必要なのは、多額の補助金ではない。日本の電力市場において、新規参入者に対する障壁（既得権益）があるのは明白で、これを取り除く必要がある。規制を単純化し、新しい規制をつくることで、新規参入者が電力系統に接続し、電力市場にアクセスできる権利を与え、予測できる状況を作ることが必要だ。

また、情報のなさから誤解をしたり機会を逃したりする人々に、情報を供給しなければならない。

その意味で、この会議における欧州からの登壇者の情報は有用だろう。スペインでは当初、電力会社が5%しか風力を使えないと言っていたが、今では30~50%の風力が電力システムに組み込まれ、うまくいっていると紹介された。ドイツでは、自然エネルギー供給は、マイナス価格がつく時があるほど十分だと紹介された。

日本でも、今こそ行動を起こさなければならない。法律の改定や発送電分離を待たなくても、個人や企業ができることはある。特に太陽光は簡単に実現可能だと思う。先ほど孫さんが、デザータックとのMOUを今日締結するとおっしゃったが、実は昨日締結済みである。「今日できることは明日に延ばさない」。この考えが、自然エネルギーのセクターに広がることを願う。

この会議で知的満足感も得られた。今必要なのは、行動することだ。

○ 村沢

バリア（既存権益）がある、と言われるが、自然エネルギーの中にもそれはある。それを崩すことでコストを下げるのが可能になる。太陽光パネルは、中国製が非常に安く、日本の3分の1ほどである。またカナダ製、イギリス製、韓国製なども増えてきている。ほかにもパワーコンディショナーにも今のところバリア（国内2社の寡占状況）がある。日本は流通が問題であり、国産パネルが高い理由も、複雑な販売及び流通の形態にあった。工事も高くつくので、標準化するべきだ。コストを下げるためにはいろいろなバリアを崩していくことが必要だ。

○ コーベリエル

バイオマスがスウェーデンで重視されている。輸入バイオも同様の優遇を受けられるべきという議論があったが、これをいろんな燃料を使ってい

るので輸入することで価格が上がりすぎなくて安全である。また大きな投資をしなくていい、国内でもできるという考えで取り入れ、今は国内生産になっている。輸入を許可して、国内の競争力を得ることでいい結果を出せた。

○ 末吉

先ほどトーマスさんが、自然エネルギーを広めるのに一人の人間、一つの組織の力では無理だとおっしゃったが、その通りだと思う。日本は社会のインフラとしての能力を活用すべきである。私は日本の金融が、自然エネルギーを含む環境への対応・世界規模の問題解決に関して、金融としての役割を果たしてほしいと強く求めている。

昨年 10-11 月に素晴らしいことが始まった。日本の金融機関が自らの手で、21 世紀行動原則「持続可能な社会に向けた金融行動原則」を作ったのだ。これには、「これからの金融機関は、自らの責任と役割をよく認識して、自らの金融ビジネスを通じて、日本・アジア・世界における持続可能な社会の形成に向けた最善の努力をする」と書いてある。その実行手段として、環境産業の育成、地域の振興のため、市民社会の活動支援のために金融が努力するという内容も入っている。これは日本の金融機関にとって画期的なことで、歴史的快挙ある。

この原則に、今日現在で 175 くらいの金融機関が署名済みである。47 都道府県すべての地銀がまずベースとしてサインしている。大手銀行、証券会社、損保会社、信用金庫、信用組合、農林中金もサインしている。これは世界でも初めてのことだろう。

今、日本でよりよい社会をつくるために、本来の機能を果たしてもらうことを、社会のいろんなインフラに呼びかけていく必要がある。金融界も

今変わりつつあるので、これらを活用し、日本の自然エネルギーを促進していきたい

○ コーベリエル

孫さんが会場に戻ってこられた。これまでの総括をお願いしたい。

○ 孫 正義

今日はお忙しいところ長時間ありがとうございます。

トーマスは昨年までスウェーデンのエネルギー庁の長官だったのを、自然エネルギー財団の理事長になっていただいた。日本は今、エネルギー問題で一番困っている時期で、原発依存に戻るか自然エネルギーに大きく舵を切るかの分かれ道にある。日本をどちらに行かせるか、あなたの力が必要だ、と言って、現役長官を辞めて来ていただいた（拍手）。多くのことを教わり、多くの友人を紹介していただき、本日も多くの友人が世界中から集まってくださった。トーマスを紹介してくれたのは、長い間自然エネルギーに命をかけている飯田さんである。若い時に原発の設計に関わり、間違っていると気づき、放射能のリスクを知り抜いているからこそ方向転換をした人である。彼の信念が私を動かし、多くの人を動かしている。財団の皆さんとの関係も、飯田さんのつながりから発生している。

我々に法律を決める力がなくても、発明の力がなくても、人を救いたい、安心できる社会にしたいと考えれば、助け合い、力を出し合っていくことができる。それが人類の素晴らしさだと思う。

まだまだ規制や技術の問題、国家間の問題などがあるが、人間が変えようと思えば、人間が作ったルールは変えられ、問題は乗り越えられる。大きなスケールでやれば、技術は進展しているので、

コストもささやかな問題だと思える、それを乗り越えられなくてどうする？と思う（拍手）。

自然エネルギーは大変なハイテク産業だ。ハイテクの素晴らしさは性能とコストの面で大変な進化を遂げることだ。恐ろしい勢いで進化するので、あっという間に再生可能エネルギーが安定的に、しかも安全に得られて、これでこれまで弱点と言われたことは全部逆転し、原発の強みも逆転すると思う。財団は多くの英知を集めるのが目的だ。財団で事業をやるわけではなく、ここでは世界中の英知・知識を集め、情熱を集めて、何倍、何百万倍の力で政治、メディアを動かし、世界中の人を良い方向に動かしてくれるのではないか。その大きな夢の小さな一歩、しかし大きな一歩を踏み出せたのではないかと思う。

○トーマス

8分早く終わるので、さっそくこの時間で行動を起こそう。

